Costume and Textile

No.33 服飾文化学会会報 2017年3月

2017（平成29）年度　第18回服飾文化学会大会のお知らせ

会員の皆様には既にお送りしましたお知らせのように、2017（平成29）年度 服飾文化学会 第18回大会を下記のとおり開催いたします。多くの皆様がご参加下さいますようご案内申し上げます。

記

開催日　2017年５月13日（土）・14日（日）
開催校　共立女子大学
〒101－8437　千代田区一ツ橋２－２－１
【研究発表】【展示】２号館802・803
【自由見学】共立女子大学博物館

１．プログラム

５月13日（土）
13：30～15：20　研究発表
15：30～17：00　特別講演
演題「日本の甲冑」
講師　池田　宏氏（東京国立博物館名誉館員）
17：10～17：40　総会
17：50～19：30　懇親会（コミュニケーションギャラリー）
※共立女子大学博物館は13日（土）のみ開館ですので見学は研究発表前にお願いいたします。

５月14日（日）
９：30～12：00　研究発表
作品･ポスター展示スピーチ
12：10～13：10　昼食
13：10～14：40　作品･ポスター展示の説明･質疑応答（展示会場にて）
※作品・ポスター展示期間
５／13（土）13：30～５／14（日）14：40
※作品・ポスター展示のショートスピーチを研究発表会場で行います。詳細は送付します。

２．参加費

大会参加費	会員	3,000円
	非会員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円
懇親会費	会員	4,000円
	非会員	4,500円
	学生会員	2,000円
	学生非会員	2,500円
昼食代（5／14）		1,000円

３．発表・参加申込

（１）発表申込締切日　2017年３月24日（金）
①既にお送りしました「発表者へのお知らせ」（２種）に沿って、第18回 大会・総会実行委員（宮武恵子）までＥメールにてお申込み下さい。（必着）
②発表形式には、口頭発表・ポスター展示・作品展示の３種があります。
③発表は未発表の研究報告で、発表は共同発表者とも本会会員に限られますので、非会員の発表希望者は学会ホームページから入会手続きをお願いいたします。

（２）要旨原稿締切日　2017年４月21日（金）
（提出先：kmiyatake@kyoritsu-wu.ac.jp）
①用紙：Ａ４縦置き、横書き、１枚
②余白：上25mm、下30mm、左右30mm
③文字：10.5ポイント、明朝体

（３）参加申込･払込締切日　2017年４月21日（金）
ゆうちょ銀行　振込口座　00130-9-324493
加入者名；宮武　恵子（ミヤタケ　ケイコ）

４．特別講演について

◆講師　池田　宏氏

「日本の甲冑」

◆講演内容

日本の甲冑は、革、鉄、漆、組紐、染韋、飾り金物など多様な素材を使って製作されていて、世界の甲冑のなかでも色彩豊かではなやかです。鎧、腹巻、胴丸、当世具足といった甲冑の種類や歴史、札（さね）や威（おどし）による甲冑の構成などについて、絵画や文献を交えながら紹介をいたします。

◆講師のプロフィール

昭和57年國學院大学大学院修士課程修了。同59年より東京国立博物館、文化庁に勤務。平成28年東京国立博物館を定年退職。平成24年「出雲―聖地の至宝―」、同25年「国宝 大神社展」などの展覧会を担当した。現在東京国立博物館名誉館員、國學院大学、千葉経済大学非常勤講師。おもな論文として「美和神社所蔵　白糸妻取威鎧の残欠について」『MUSEUM』473号東京国立博物館（1990）、「徳川家康の甲冑―歯朶具足と南蛮胴具足を中心に―」特別展『徳川家康の遺愛品』三井記念美術館（2010）、「神社の宝物と神道美術」特別展『国宝 大神社展』東京国立博物館（2013）などがある。

５．自由見学

◆展示テーマ「和と洋が出会う博物館
共立女子大学　コレクション・１」

昨年（2016年）、10月にオープンした共立女子大学博物館では、ある一つのテーマを設けて展示を行う「企画展」と本学の収蔵品を紹介する「コレクション展」の２種類の展示を行っていきます。今回は記念すべき第一弾となるコレクション展を開催いたします。本学博物館のコンセプトである和（きもの）と洋（ドレス）が出会う博物館にふさわしいコレクションの数々をお楽しみください。

展示期間：３月７日（火）～５月15日（月）
休 館 日：土曜、日曜、祝日（５／３を除く）
　　４月11日（火）、12日（水）
入 館 料：無料
※休館日、開館時間が変更になる場合があります。詳しくは当館のウェブサイトをご覧ください。
当館ＨＰ：http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/muse/

◆５月13日（土）は、服飾文化学会第18回大会・総会開催につき、9：30～16：30まで臨時開館しております。ご来館をお待ちしております。

６．アクセス

【最寄駅】

＜神保町駅　Ａ８出口＞　徒歩１分
　東京メトロ半蔵門線・
　都営地下鉄三田線・新宿線
＜竹橋駅　ｂ１出口＞　徒歩５分
　東京メトロ東西線

【行き方】

７．連絡先

服飾文化学会　第18回大会・総会実行委員会
〒101-8437　千代田区一ツ橋２－２－１
　　共立女子大学　被服意匠研究室
　　宮武恵子
　　（kmiyatake@kyoritsu-wu.ac.jp）
　　TEL＆FAX：03-3237-2496

2017年度　総会のお知らせ

第18回大会において、総会を開催いたします。

本学会発展のために、多数の会員の総会への参加をお願いいたします。

正会員の方は、５月８日までに、出欠を記載した返信はがきを事務局へ返送してください。

日時：2017年５月13日（土）17：10～17：40
会場：共立女子大学　２号館802教室
議事（予定）
・平成28年度　事業報告、決算報告、監査報告
・平成29年度　事業計画案審議、予算案審議

特集記事 「江戸時代に花開いた女性のファッション」

長崎　巌（共立女子大学）

室町時代にすでに現在の形になっていたきものは、桃山時代を経て江戸時代になると、きものを構成する、生地、模様、加飾技法をという三つの要素の組み合わせの違いが、時代や身分、階層による特徴として現われた。そこには、常に女性たちの好みと美意識、あるいは心理が反映されている。

近代まで身分制度があった日本では、古代以来、身分に応じた衣服を着用させることによっては、身分の違いを人々に常に意識させ、その体制を維持するということが行われてきた。徳川幕府が世を治めた江戸時代においても、建前上「表」（公的な世界）の世界にいる男性には、それゆえ衣服の自由な選択は許されなかった。

これに対して、「奥」（私的な世界）は非公式な世界であり、そこで起こっていることには関知しない、という建前から、「奥」の世界に生きる女性に対しては、社会秩序を乱さない限り、衣服の選択が暗黙のうちに許されていた。それゆえ江戸時代の女性たちは、それぞれの経済力や美意識の違いを小袖に反映し、様々な様式の違いや、時代による変遷を生み出すこととなったのである。

江戸時代初期には、武家の経済力が町人に勝っていたため、同じく綸子を生地としながらも、武家女性が摺箔で地文を施し、刺繍と鹿子絞りで模様を表した高価な小袖を着用していたのに対し、町人女性は主に絞り染めを中心に描絵を併用して模様を表わす小袖を着用していた。

しかし17世紀中ごろになると、これら二つの小袖様式が互いに影響しながら接近して一つになり、「寛文小袖」と呼ばれる、身分を越えた最初の普遍的小袖様式を作り上げる。動的な模様構成と個性的な模様素材が印象的なこの小袖様式は、江戸時代前期の女性の美意識が小袖ファションに素直に反映された例といえる。

これに続く時期に生まれた友禅染は、それまでの絞り染めを中心とする染織技法に較べて、遥かに多彩で繊細な模様表現を可能性にしたことで、18世紀以降の染織技法の一つの主流をなすに至った。友禅染はもっぱら町人女性が好んで使用し、彼女たちの小袖を飾ったが、その理由は、この新しい技法が華やかな色彩と絵画的な模様表現を可能にし、町人女性がその新しい装飾美にすっかり魅了されてしまったからである。それはやがて、使用する生地をこの技法に適した縮緬へと一本化する傾向を生み出した。

技法の完成とともに、友禅染においては模様の細密化・多色化が進み、暈しも併用して、技術の限界に挑むかのような精緻で華やかな作品が多数生み出されたが、18世紀も後半になると、友禅染に新しい方向性が生じる。それは、糊防染を多用しながら色挿しを控えて、模様を地色に対して白抜きに表すもので、小袖意匠は、比較的小柄な単位模様を散らすように配するものが多くなった。

これに対して町人女性よりも保守的であった武家女性は、友禅染が誕生して以降も、綸子地に絞り染めと刺繍を多用した従来型の小袖を好んだが、18世紀後半から19世紀にかけて、武家女性の価値観と美意識を反映して、次の二つの特徴的な様式を生みだした。ひとつは、綸子を生地に用い、模様を刺繍と絞り染め・摺匹田などを用いて表したもの、いまひとつは、縮緬地に類型的な表現で架空の風景模様を表わしたものである。後者は、町人女性の小袖に流行した風景模様の影響で現れた様式と考えられ、技法においても友禅染に近い技法を用いる。

一方、この時代、富裕な女性の小袖には、中流町人女性のそれとは大きく異なる様式が流行する。生地は綸子が多用され、主に絞りや刺繍を用いて、模様を豪華かつ繊細に表わす。

また、江戸時代後期には公家の女性たちも、儀礼的な場を除いて小袖を用いるようになり、独自の装飾様式を持つに到った。それは、刺繍を中心に大振りな草木や花卉などを表したもので、多くはこれらのモチーフを組み合わせて風景模様を構成する。

以上のように江戸時代には、時代の変遷とともに女性たちの価値感と美意識を反映して多様な様式が展開したのである。

紫縮緬地住吉風景模様小袖
（江戸時代・19世紀
共立女子大学博物館）

２０１６（平成２８）年度　研究例会の報告

平成28年度研究例会は10月29日（土）に、お茶の水女子大学（大学本館306室）で開催されました。「ファッション展とアート・ミュージアム」と題して、２名の美術館学芸員による講演が行われました。出席者は学会員と非会員をあわせて53名でありました。講演内容は次の通りです。（研究例会担当　新實五穂）

「オートクチュール展とウォルトの受容再考―ペルタン、ディケンズを通してみるウォルト」

三菱一号館美術館学芸員　岩瀬　慧

2016年３月４日から５月22日まで、三菱一号館美術館で「PARIS オートクチュール―世界に一つだけの服」展が開催された。19世紀から21世紀までのドレス、テーラード・スーツ、靴や帽子などの装身具類、ファッション写真など合計137点の作品を通して、オートクチュールの変遷をたどる展覧会であった。

ガリエラ宮パリ市立モード美術館の所蔵品から、2013年にパリ市庁舎で開催された「Paris Haute Couture」展をベースとしながら、同館館長オリヴィエ・サイヤール初めアレクサンドル・サムスン、ヴェロニク・ベヨワおよびコリーヌ・ドムら学芸スタッフと協同で企画を行った。当館の空間特性に従い、東京展に向けて作品が再選定され、新規出品も多数となった。京都服飾文化研究財団にも特別協力を依頼し、図録やパネル制作にあたり石関亮氏、着付け・展示作業について友成久実子氏、谷智恵美氏、伊藤ゆか氏、上山尚子氏、梅野史子氏の丁寧かつ専門的な知識・技術の恩恵に与った。

本展は７章で構成され、オートクチュールが発明された19世紀、コルセットの終焉、「狂乱の時代」、第二次世界大戦を経てクリスチャン・ディオールの影響とニュー・ルックの登場、60年代の刷新とプレタ・ポルテとの関係、現在に至る「クリエーションの実験場」の順に展示した。展覧会は時系列に配置しながらも、時にサイヤール館長により、時代を超えて響き合うドレスの組み合わせが挿入された。１章のウォルトのドレスに対して、20世紀後半のラクロワが歴史趣味からウォルトのバッスルスタイルをあえて踏襲し、大柄な花模様のドレスを通してオマージュを示した例があった。シルエット・技法・デザイン・色などの複数の要素を絡めて併置することにより比較が可能となった。

2016年はファッション展が多数開催され、「ファッション史の愉しみ―石山彰ブック・コレクションより―」（世田谷美術館）「こどもとファッション―小さい人たちへの眼差し」（島根県立石見美術館、神戸ファッション美術館、東京都庭園美術館）「MIYAKE ISSEY展：三宅一生の仕事」（国立新美術館）「Modern Beauty: Art and Fashion in FRANCE」（ポーラ美術館）、「空へ、海へ、彼方へ―旅するルイ・ヴィトン」（赤坂特設会場）「モードとインテリアの20世紀展―ポワレからシャネル、サンローランまで」（パナソニック 汐留ミュージアム）と枚挙に暇がない。ブランドが主体となり開催される例も目立つ。

当館では、ファッション展を初めて開催したことにより、従来の近代美術を中心としたプログラムでは引きつけられない、10代から30代までの若年層の女性鑑賞者が急増した。未開拓層に館を周知し、来館のきっかけとなったように感じる。ドレスをデッサンで描き取る学生の学ぶ姿勢は見過ごせず、世代や性別に関係なく遍く鑑賞者を迎え入れる企画として、展覧会の可能性を新たに拡げていくと思われる。

最後に、デザイナーとはどのような存在なのか、どこから始まったのかを本展をきっかけとして考察するならば、ウォルトまで遡る必要がある。顧客のスタイルに関して全体の調和をみて判断する立場は、まるでモデルを前にした芸術家のような振る舞いだという。ウォルト評を最初に書いたとされる、チャールズ・ディケンズの「パリのドレス」という記事は、そのベースとなる共和主義のジャーナリスト、ウジェーヌ・ペルタンの『新バビロン』を下敷きにした。オスマンによる都市改造の最中、第二帝政期の贅沢なもののひとつと捉えられたのである。1860年代のウォルト受容は歴史的調査の必要性があり、研究課題と思われる（当館で６月刊行予定の研究紀要で追跡調査）。

岩瀬氏の講演

「パナソニック 汐留ミュージアムのファッション展と生活文化展」

パナソニック 汐留ミュージアム学芸員　宮内真理子

パナソニック 汐留ミュージアムは、パナソニック株式会社の東京本社ビル４階に開設されている企業美術館である。2003年４月の開館以来、収蔵作家のジョルジュ・ルオーの関連の企画展を開催すると共に、パナソニックの社業と密接に関わる「建築・住まい」「工芸・デザイン」を主要テーマに設定し、生活文化を紹介することを企画展の守備範囲の一つとして展覧会を開催してきた。

これまで当館で行われた生活文化に関する展覧会の多くは、主題となる時代や地域、作家、グループに特徴的にみられる美的な生活を、展示された作品群をとおして見つめるものである。衣服やアクセサリーなど服飾に関する作品を紹介する機会も少なくない。まず、それら服飾関連作品が陳列された事例を紹介し、その後当館で最初のファッション展となった「モードとインテリアの20世紀展」の概要と当館での開催の意義を述べたい。

2010年夏開催の「ハンス・コパー展」では、コパーによるオートクチュールの為の装飾的な陶器製ボタンを展示した。また同年秋の「バウハウス・テイスト バウハウス・キッチン展」では、バウハウスにおける織物工房の作品《バウハウス・ワンピース》２点が出品された。2011年夏に開催の「濱田庄司スタイル展」では作家のライフスタイルの紹介目的で濱田庄司が愛用したスーツ、ネクタイ、帽子などが並んだ。また、同年秋会期に開催の「ウィーン工房1903－1932」では122点と多数の服飾関連作品が登場し、衣装４点、バッグやブローチ、ネックレスなど装身具45点に加え、衣装やテキスタイルのデザイン画、版画も展示された。続いて開催の「今和次郎 採集講義展」では、風変りな衣装《『東京銀座街風俗記録』より「統計図索引」を立体模型》が展示された。今（こん）による衣服調査記録の索引としてイラストで示されたユニークな図版を、展示でも索引の機能を持たせて新たに立体模型として制作したものだった。

このように服飾関連作品が展示される機会には恵まれていたが、ファッションをテーマとした展覧会開催は、今年度秋の「モードとインテリアの20世紀展」[i]が館開館以来初である。内容は、20世紀初頭から60年代までのファッションの変遷を見せることを主軸に、同時代の住居や公共空間のインテリアも概観するもので、その出品作品の全点を島根県立石見美術館から出品いただいた。展示は４章仕立てとして1900年から20年毎に章をたて、衣装の展示ステージの背景に各時代を象徴するインテリアの大型パネルを設置した。版画や雑誌、書籍などの出品作品にもインテリアの要素が認められるものを多く選んだ。

実は本展開催が決定された折には、20世紀のモードの流れを語る服飾に特化した企画内容であったのだが、実現にあたってより社業との関連性、親和性を強めることを意識し、インテリアの要素を追加した経緯がある。モードの流れを語るという軸は変えずに、「衣」のみならず同時代の「住」の側面を併せて紹介する企画への修正は、当館で服飾作品を展示する意義を深める重要な契機であった。衣服と生活空間はいずれも人間のいとなみを包むものとして、それぞれの時代の装飾デザインの傾向が顕著に反映されている。ファッションをそれ単体で紹介するのではなく、ファッションと暮らしの環境とを関連付けながら、同一空間で紹介することで、モードやインテリアといったカテゴリーの垣根を越え、モダンデザインの潮流まで語ることを、当館におけるファッション展の在り方の一つの解としたのである。

本展は無事閉幕し、来館者数は当初の目標数値を大きく超えたものであった。来館者全体のうち新規で訪れた来館者の割合が大きく、新しいテーマであるファッションが引き寄せた結果といえる。これは、展示の軸をファッションからずらさなかったことに因るものだろう。今後も同様の来館者層を惹きつけ、かつ当館らしいファッション展の可能性を探りたい。

質疑応答での岩瀬氏（右）と宮内氏（左）

[i] 展覧会の正式名称は「島根県立石見美術館コレクション　モードとインテリアの20世紀展　ポワレからシャネル、サンローランまで」である。このほか、本文で登場する展覧会タイトルはいずれも文字数の都合上、メインタイトルのみを表記した。

２０１６（平成２８）年度　論文発表会の報告

本年度の論文発表会は桃の節句の３月３日（金）、文化学園大学C071番教室にて実施された。参加者は昨年同様75名で、卒業論文９件、修士論文２件、計11件と発表件数が多いため13:10より開始した。

＜プログラム＞

開会の辞　　副会長：岡田 宣世（女子美術大学）

卒業論文

座長：藤田 恵子（東京家政学院大学）

１．女子高生制服の変遷にみる時代の変化
野原 優菜（実践女子大学）

２．ユニバーサル・ファッションの追求　－女性用メモリーベスト実用化に向けての研究－
菊池 祥美（和洋女子大学）

座長：伊藤 瑞香（和洋女子大学）

３．能装束広袖ものにみる着装の変化について
－絵画資料を中心に－
松野 亜紀（共立女子大学）

座長：中川 麻子（大妻女子大学）

４．1860-70年代におけるホイッスラーの絵画にみる白いドレスの表象
佐藤 梓（お茶の水女子大学）

５．エプロンが子どものシンボルとして確立するまで －19世紀イギリスを中心に－
長野 愛樹（日本女子大学）

座長：大網 美代子（大妻女子大学）

６．光る素材を用いた新しい衣服の提案
栗山 恵実（文化学園大学）

７．クリスチャン・ディオールの“Robe de Muguet”に発想を得たドレスのデザインと制作　長井 梢（東京家政大学）

座長：内村 理奈（日本女子大学）

８．*Les Misérables*の登場人物の服装デザイン
－1833年２月16日コゼットの花嫁衣裳－
永谷 千恵（東京家政大学）

９．モホリ=ナギの造形理論　－バウハウス期を中心に－　小島 未来（杉野服飾大学）

修士論文

座長：内村 理奈（日本女子大学）

１．雑誌*Punch, or The London Charivari*の服飾史に関する統計的な分析
根津 夏菜子（東京家政大学大学院）

座長：能澤 慧子（東京家政大学）

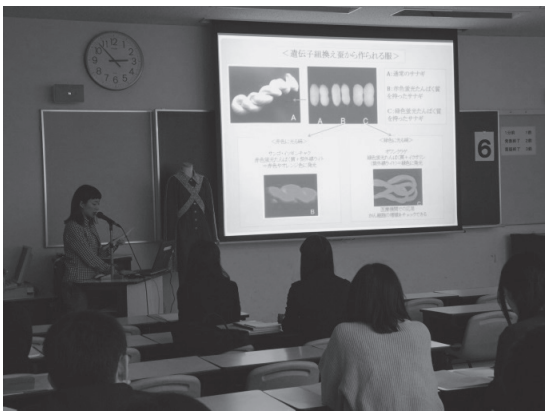
２．宝塚歌劇のジェンダーと流行　－衣装・服装に着目して－
平林 華子（日本女子大学大学院）

閉会の辞　　会長：能澤 慧子（東京家政大学）

開会に先立ち岡田宣世副会長から「論文発表会は、学生時代の集大成である卒業論文や修士論文を他大学の方々の前で発表し、質疑応答や語らいを通して得られる貴重な経験の場である。」と参加者への期待が述べられた。

卒業論文の最初は戦前から現代までの学校制服の変遷を文字資料・アンケート・インタビューと多様な研究方法を駆使して分析し、社会背景を捉えた野原さんの発表で、時代のうねりが袴やスカートの丈に反映された点を画像から指摘した。

２番目の菊池さんは、超高齢化社会に向けて、女性用メモリーベストの実用化を研究した。調査結果をグラフ化し、試作品の表示も工夫した発表で、今後求められるユニバーサル・ファッションへの課題に示唆を与えるものであった。



実物資料製作を伴う研究発表

３番目は、能装束の中でも先行研究の少ない広袖ものに注目した松野さんの発表で、絵画資料の分析から着装の変化を捉え、演目毎の着装の違いを述べた。衣装の形状や江戸時代後期の区分、性差から能の発生まで活発な質疑応答がなされた。

４番目の佐藤さんはホイッスラーの描いた白いドレスに唯美主義の影響を解明した。自然の白、インドのモスリンの素材感、ギリシャ趣味の影響をはじめ、社会との関係性が論じられた。

５番目は、19世紀後半の少女向け小説や雑誌からエプロンが子どものアイテムとして確立した研究をした長野さんの発表である。日本の場合やテニス用のエプロンなど質疑応答がされた。

６番目の栗山さんは安全反射服・光ファイバー服・蓄光素材服・ＥＬワイヤー服・ＬＥＤ服の調査を基に光る素材を用いた日常着をデザインして実物製作を行った。安全性から幅広いターゲットへのデザイン展開が期待される新提案であった。

７番目、クリスチャン・ディオールの“Robe de Muguet”（すずらん）に発想を得たドレスのデザインと制作を行った長井さんは、質疑応答で裾をワイヤーではなく反らせる技法を説明した。

８番目の永谷さんは、『レ・ミゼラブル』の服飾描写に着目し、1833年２月16日コゼットの花嫁衣裳のイメージを捉えた。文学作品と服飾史の照合では矛盾を見出し、訳語の問題点を指摘した。

９番目は、モホリ=ナギが造形理論を確立した1920年代およびバウハウス期の活動を小島さんが論じた。質疑応答ではナギの教え子たちに継承された教育理論が解かれた。

修士論文では、初めに根津さんがイギリスの週刊風刺雑誌『パンチ』６年分を電子化し、統計的な分析から服飾を探った発表がなされた。単語の特性を数値化した共起ネットワークでは服飾および色・素材・形状・イメージが結ばれて表れた。

最後は、宝塚歌劇の衣装におけるジェンダーの表象を取上げた平林さんの研究で、『ベルサイユのばら』『ロミオとジュリエット』『ノバ・ボサ・ノバ』の三作品を比較して男役・娘役という性別が衣装や色に表現されていると発表した。

以上、11件の発表は、多岐にわたる研究領域と研究法およびそれらの成果を表すものであった。その点を「お腹がいっぱい」と称された能澤慧子会長は、阿波踊りを思い出すと語られ、発表する人と聞く人の姿勢を閉会の辞で述べられた。

発表後、Bun Caféでの懇親会は60名と多くの参加者で盛会であった。司会は、論文発表会担当で、ポスターを作成した伊藤瑞香理事が務めた。伊藤紀之元会長による乾杯の発声では、先生が学生時代に初めて出逢ったホイッスラーの絵画の話題に始まり、質問に対して「ありがとうございます。」と返答した発表者たちへの称賛、今後の研究姿勢を熱く語られた。狭い空間ながら楽しく自由な雰囲気の中、交流を深める機会となった。

（論文発表会担当　福田博美）

講評を述べる能澤慧子会長

懇親会、伊藤紀之元会長による乾杯

＊＊＊＊＊ 会員より ＊＊＊＊＊

■近著紹介

著者名：辻元よしふみ、辻元玲子（イラスト）
書　名：『軍装・服飾史カラー図鑑』
発　行：イカロス社
発行年：2016年８月９日

古代から現代までの軍服や男性の服飾史をカラーのイラストレーションによって解説する服飾史図鑑。立ち絵姿のほか、後ろ姿や着用方法、徽章・階級章、帽子、などのアクセサリー類も細やかに描き出している。ローマ軍団百人隊長、ドイツ騎士団、ランツクネヒト、ポーランド有翼騎兵「フサリア」、フランス王室銃士、プロイセン陸軍将校、ロシア帝国陸軍元帥、英国陸海軍将官、ドイツ国防軍、ナチス親衛隊、大日本帝国陸軍、米陸軍航空軍、陸上自衛隊儀仗服、英国近衛兵など、著者の視野は広い。

著者名：伊藤亜紀
書　名：『青を着る人々』
発　行：東信堂
発行年：2016年11月30日

「サッカーのイタリア代表は、アッズーリ（Azzuri）と呼ばれる。いうまでもなく、彼らが青（azzurro）のユニフォームを着ているから…」と始まる本書は、中世から近世初期のイタリア服飾に現れた青の意味を主題としている。女流作家のクリスティーヌ・ドゥ・ピザン、英雄ヴァレラーノ・ディ・サルッツオと女傑とされたその妻、庶民や貴婦人などが着た様々な青、その多様に変容する象徴性を追究し、考察している。色の持つ意味の深さに驚かされる。

豊富なカラー図版（約90頁）には珍しい資料も多く、これを鑑賞するだけでも愉しい。

＊＊＊＊＊ 事務局より ＊＊＊＊＊

●会員異動（敬称略、申込み順）

☆新入会員（平成28年９月～平成29年１月）

正会員
美　谷　千　鶴（日本女子大学）
学生会員
田　子　文　菜（國學院大學大学院）

●会費納入のお願い

平成29年度分会費の納入をお願い致します。振込用紙は28年度会報No.33に同封いたします。この際、28年度以前の会費未納の方は、併せてお振込みください。

郵便振込口座：番号「00150-7-184189」、口座加入者名「服飾文化学会」
会費：正会員6,000円、学生会員3,000円
振込期日：平成29年５月末日

学会運営は会員の学会費によっております。平成29年度学会の円滑な運営のため、平成29年５月末日までに納入をお願い致します。

●学会誌・会報等の送付先変更届のお願い

お送りした学会誌、会報、催事のお知らせなどが転居先不明で、毎回相当数戻って参ります。学会は宅配便も使っていますので、郵便局への通知だけでは転送できません。転居等、異動がおありの場合は、学会事務局にもできるだけ速やかにお知らせください。

また会費納入の振込用紙連絡欄に転居先を記入される方もいらっしゃいますが、振込用紙をチェックする担当者とは異なります。転居等の異動はご面倒でも、事務局へ別途郵便、またはＥメールでお知らせ下さいますようお願い致します。

会報　No.33：2017（平成29）年３月31日発行
編集発行人：服 飾 文 化 学 会
事務局：173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1
東京家政大学服飾史研究室
TEL：03-3961-8273
E-mail：nohzawa@tokyo-kasei.ac.jp
URL：http://www..fukusyoku-bunka-gakkai.jp